



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	現代社会と故郷：樺太『故郷』訪問ツアーにおける新しい『故郷』の像
Author(s)	宮下，雅年
Relation	北海道大学観光学高等研究センター共同研究会「観光創造研究会」設立準備会，「観光創造学を考える」研究会録．2013年11月23日，24日．北海道大学遠友学会．
Citation	「観光創造学を考える」研究会録 / 北海道大学観光学高等研究センター共同研究会「観光創造研究会」設立準備会，47-54
Issue Date	2014-07-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/56568
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	conference paper
File Information	04miyashita.pdf, 発表



◆研究発表 4

現代社会と故郷～樺太『故郷』訪問ツアーにおける新しい『故郷』の像

北海道大学メディア・コミュニケーション研究院

宮下雅年

唱歌「故郷」にみる日本の故郷観

今日は、こういうタイトルで、樺太における故郷訪問の旅に触れながら、現代社会に生きる人びとはどのように故郷に向き合っているか、そこに新しい芽生えというか、創造性の萌芽が認められるとすればそれはなにか、こういうことをお話しして、皆さんからご批判を頂きたいと思います。

手順としては、資料にありますように、概念としての故郷、故郷のイメージの普及とその綻びについて述べてから、その修復の例を挙げます。修復、復元とは、あくまでも過去に固執するものですが、はて、未来を指向する方向性を見いだせないか、そういう展望にこそ、何か可能性が宿っているのではないかと私は思いますので、その例をいくつか挙げて締め括るというかたちにしたいと思います。

故郷という概念が、明治の日本、国民国家の創成期に、国というものを補完するかたちで、「我が国」をより身近に引き寄せるための補完物として創り出されてきたというのは、もう定説といっていいのか、疑いようがありません。そういう故郷について語る際に、定番として出されるのが、この文部省唱歌「故郷」なんですけども、いろいろと言われている中で、研究の主流というのは、この歌がつくられた 1914 年（大正 3 年）、その時代診断というものから、この歌の問題点を洗い出していく、そういった歴史学の作業が主流なんですけども、とりあえず私の関心事はそこになく、むしろ問題は、この歌がその背景にある自然観なり倫理観が本当にあるのか、その実在性や普遍性について疑問視されながらも、この 100 年間歌い続けられている、この事実こそ、問うべきことがあるのではないかと考えますので、とりあえずこ

の歌の特性について一瞥しておきたいと思います。

まず、この歌は故郷を歌いながら、民謡とは違って固有名詞が欠如していますので、そこがどこなのか分からないという抽象性を帯びています。その意味では内容的には空疎なんですけど、だからこそ逆に、広く通用するという面があります。また、幼年期の純粹無垢な遊戯、あるいはその遊びの舞台である山や川、これも同じく汚れないものとして賛美されている。さらに、もう 1 つの倫理性ですが、親孝行なり友情の重要性が示唆されている。そして、故郷というのはいつの日か帰るべき場所、そして帰還する者を優しく迎え入れてくれる、永劫不変の場所であると示されています。だけでも、「石をもて追はるるがごとくふるさとを出しかなしみ消ゆる時なし」と歌われるような苦い故郷の思い出と対比してみると、この唱歌がいかに優等生ぶった望郷歌であるということは歴然としているわけですね。それはともかく、私が同行した樺太故郷ツアーの旅仲間も、道中この歌を歌うんですね。歌いながら、昔は山でフレップの実を摘んで口の周りが紫色になったんだとか、浜でぬるぬるしたシシャモを掬って採ったんだ、そういう回想をして、この歌の抽象性を乗り越え、解消して、それぞれ具象化していく。そういう意味では、この歌は、それ自体は抽象的なんですけど、とても大きな器であって、しかも強い求心力をもっているというところがあるといえます。とはいっても、当地では、今じゃフレップも一フレップというのは、アイヌ語の「赤い実」ということなんですけど、ブルーベリーみたいなものなんですけど、そのフレップもなかなか見つからない。ましてやカラフトシシャモなんていうのは浜に寄せてこない。山や川、これは相変わらずあるかという、

この山も今では植林によって微妙に姿を変えている。川は、川幅だけでなく川筋も変わっている、同じ川とはとても思えない。そこは到底、帰郷者を昔ながらに優しく迎え入れてくれる場所ではなくなっている。だけでも歌わずにはいられない。なぜか？ この唱歌が私たちの故郷イメージを 1 世紀にわたってがんじがらめにしてきた、そういうところがあるからですね。その威力は、まさに故郷を奪われ、その麗しさなんていうのは幻に過ぎないとよく分かっている樺太引揚者も、この歌を歌ってしまう、そういうところに端的に示されています。

樺太探訪～恵須取への道程と慰霊

前置きは以上にして、樺太、恵須取、あるいは塔路という町なんですけど、そこに向けてスタートします。私が同行した樺太故郷訪問ツアーなんですけど、2 回参加しているんですが、一行はだいたい 15 名です。平均年齢は 70 歳の前半、ただ、お孫さんも加わったりで、その分、平均年齢も若くなっているのですが、80 歳くらいの方が多いです。最高齢は 85 歳の女性、もちろんそのほとんどは、かつてこの地に住んでいた方々で、私のような無関係な者は例外ですね。

さて、サハリン島全体は、面積としてはほぼ北海道と同じ。ご存知のようにこの北緯 50 度から南が、1905 年から 1945 年まで日本が領有、統治していたいわゆる樺太です。1941 年の時点で、約 41 万人が住んでいました。稚内からフェリーで 5 時間半、大泊という、現在のコルサコフですね、そこに着くんです。その昔は 8 時間くらいかかったそうです。このコルサコフから、ここがユジノサハリンスク、豊原といったところですね、43km くらい、40 分くらいで着きます。ここを発って、ドリンスク（落合）という町を経て、オホーツク海の海沿いを北に進んでいきます。島を最短で横断できる山あいの道を通って、西海岸に出て、それから延々と、北緯 49 度まで北上していく。そうするとやっとここ、ウクレゴルスク、恵須取に着

くわけです。サハリン州の州都はユジノサハリンスクー現在、サハリンの人口は 50 万人を僅かに割るくらいなんです—このユジノサハリンスクに 20 万人住んでいて、いわゆる一極集中型、近年はここだけが都市化しているというところがあります。ユジノサハリンスクを出て、ウグレゴルスク、これは「石炭の山」という意味なんですけど、その名のとおりに、かつての恵須取は炭鉱と製紙業のまちでした。こういう山道も雨が降ると手がつけられなくなるんですが、ここを抜けるとまっすぐな道になるんですね、そしてやっと辿り着くんです。で、人口は 1920 年には僅か 600 数名の北限の小さな集落だったんですけども、1930 年代、樺太の石炭の需要が高まるにつれて、飛躍的に人口が伸びていきます。1940 年の国勢調査で、豊原市の人口は 3 万 7 千人でしたけれど、恵須取の場合は 3 万 9 千人、さらには塔路という町、これは恵須取から分町したところですが、1938 年に独立し、1940 年には 3 万人が住んでいる。合わせて、この 2 つの町だけで、樺太全島の 6 分の 1 にあたる 7 万人近くが住んでいたということになります。

ユジノサハリンスクを発って 8 時間あまり、やっとウグレゴルスクの街が見えてくるわけなんですけど、まず目を引くのは旧王子製紙の煙突なんです。工場内は今では荒らされ放題、廃墟とされているわけです。その中に入ってみると、鉄骨やボイラーなどの残骸があちこちにあり、凄みを帯びて私たちを待っているわけです。この種の廃墟と化した、産業遺産というんですか、樺太の拓殖というのは、工業が主体でありましたから、恵須取だけでなく、こういった廃墟というのは、樺太各地にあります。ともあれ、放置されたまま、語られない建造物というのは、工場跡だけではなくて、例えばこのようにポツンと場違いに佇む大鳥居も、解体にお金がかかるというそれだけの理由で、70 年もそのままのところに建っています。これもまた、沈黙を強いられたランドマークです。故郷は面影だけを残して変わり果ててしまいました。

ツアーの時期は、ちょうど月遅れのお盆で、墓参りをする頃なんですけど、私たちの1つの目的もそれです。とはいっても、樺太の日本人墓地は今ではほぼ原野、山林になっているわけです。恵須取では、かつての共同墓地から日本人の墓石を撤去して、その上にロシア人の墓が点々と作られています。その一角に、かつてこの地に住んで没した日本人の霊を慰める鎮魂の碑が、1989年に有志によって建立されました。それ以後、訪問者はいってみればここを聖地として、この場でそれぞれ、積年のこみ上げる思いをつぶやきながら合掌し、肉親や友人の霊よ安かれと祈るわけです。しかしそうはいっても、鎮魂碑は墓ではなくて、いふならば遺骨のない墓、ある種の抽象的、代理的な表象であるわけです。ちょうど唱歌「故郷」に相当する、それ自体は空っぽの大きな器といえます。そこにあれこれと思いが注ぎ込まれるわけですが、それでは思いの丈は打ち明けられない。心のつかえを解きほぐすことができない、そんな場合があるわけで、この抽象性と対比される慰霊のもう1つの模様をご報告します。

「私」固有の故郷の復元

今回の旅の仲間の一人、仮にAさんとしておきます。1942年1月に恵須取近郊の農家に生まれました。現在71歳。Aさんは生後11ヶ月の1942年12月にお母さんを亡くします。自家の農地の外れに埋葬したそうです。敗戦後、ソ連側には食糧の調達源の確保という狙いがあったて、農家だったAさん一家は4年間抑留されて、Aさんが7歳の時、1949年に父、兄、姉とともに引き揚げて函館に上陸しました。そういう経歴の持ち主で、今回ご母堂の慰霊のために、このツアーに参加したんですけども、ゆかりの地といっても、開墾した所は今や跡形もない。それでも、このあたりと思われるところで手を合わせたい、そんなやむにやまれぬ気持ちから、Aさんはいってみれば道端に塚を拵えて、文字通り御霊に呼びかけ、御霊を招き寄せるんです。霧がかかる山の向こうから、ピン

ク色の、ヤナギラン（あるいは盆花）と呼ばれるんですけど、そうした草花の群生を越えて、母の御霊が寄りつく。このようにして、素朴ともいえるような神祇信仰に支えられて供養が行われました。それは即席の招魂、慰霊の儀式でしたけど、出来合いのものではない分、生々しさを帯びていて、鎮魂碑を中核とするような公式の墓参の抽象性、万能性が醸し出すものとは、いささか違う、Aさん固有の故郷がここに出現した気がしました。

制度化された故郷の表象とは対照的な、「私」に固有の故郷の復元、その例をもう1つ挙げます。旅の仲間が唱歌「故郷」を好んで歌うと申し上げましたが、面白いことに「塔路小唄」というローカルな歌も、バスの中で大声を出して歌うんですね。

胸の氷も春吹く風に
とけて想いも塔路ぢゃないか
名なし草さえ花咲くところ
咲いて実らぬ花はない

乙女心をネオンの影で
思い暮らすか末廣通り
強いばかりが男ぢゃないと
濡れて咲いてる岩桔梗

霧に抱かれて間宮が明けりゃ
黒いダイヤの積取船も
炭都（たんと）想いを出船のドラに
こめて朝日の沖へ行く

1928年、「波浮の港」が大ヒットします。それ以来ローカル・カラーが商品化されて、ご当地ソングというものが続々と出てきます。この塔路小唄もその1つです。1941年、敗戦直前なんですけども、ポリドールから発売されました。唱歌「故郷」の曲調と突き合わせてみると、当然のことながら固有名詞を盛り込んで、具象的です。それも極めて地域限定的です。このあたりは半年ほど厳

しい冬が続きました、その間、海も凍結します。「間宮が開けりゃ」というのは、春になって間宮海峡の氷が溶けて、船の往来が可能になるということです。「岩桔梗」とか「黒いダイヤ」とか、そこに住んでいる人にはすぐ分かることですが、独特の風物が散りばめられています。ここに、何か無垢なものがあるとしたら、炭鉱夫の男に思いを寄せる、カフェの女給の純真さでしょうか。倫理性、強いていえば、一途に待ち望めば、氷の海も開けるように思いも通じるということかもしれません。ご当地ソングとはいっても、炭鉱のまちを舞台にした男女の愛がテーマです。このような唄を、早熟な子どもたちが、門前の小僧よろしく、聞き覚え、10歳の頃に親に隠れて歌ったように、80歳を過ぎた今、これを歌うわけですね。そうやって、唱歌「故郷」の優等生ぶったものを中和していく。そうやって解消して、故郷を手元にぐいっと引き寄せようとしたんだと私は思います。

日本は、近代化の過程で、殖産興業の旗印を鮮明にしつつ、国民を生まれ故郷から追放するということを、大なり小なり繰り返してきたと思います。たとえば、冷害や凶作によって農村が疲弊し、口減らしのために娘を身売りすることもあったでしょう。農業だけではやっていけなくて、兼業化した、あるいは出稼ぎに出た、ということもあったでしょう。それでもだめで、一家を挙げて、農業を諦めたり、村を引き払ったりするということもあったでしょう。ダム建設で村が水没する、そのために村そのものが遺棄されたということもあったでしょう。こんなふうにして100年にわたって徐々に、故郷喪失が浸透していきます。

これとは対照的に、樺太ではいきなり、何かなんだか分からぬうちに、島民は故郷を奪われてしまいます。1945年8月9日、ソ連は日ソ不可侵条約を一方的に破棄して、ひたすら領土の奪還を目指して樺太に攻め込んできました。恵須取などはあっという間に灰燼に帰してしまいました。そういうわけで、北の住民たちは、取るものもとらず、ソ連の爆撃機に追い立てられながら、山越

えをしたり、海沿いをぬったりして、南の豊原を目指すんですけども、この逃避行の過程で、まあ、足でまといになる子どもや老人が山中で棄てられたり、絶望のあまり一家心中したり、そういったさまざまな悲劇が頻発するわけなんですけども、それはともかく、ソ連の攻撃は8月15日の天皇のいわゆる玉音放送の後も行われ、23日まで続きます。この間、樺太庁は、緊急疎開と称して、女性、子ども、高齢者を北海道に避難させるわけなんですけども、この疎開船に乗れず密航したという人もいて、合わせて8万人ほどが避難しましたけども、その後ただちにソ連側は、日本人が島を離れるのを禁止します。そのため、30万人あまりが島に抑留されてしまいます。ソ連としては、当面、社会の基盤を担わせる日本人が必要だったわけで、島から日本人が引き揚げることができるようになったのは、1年以上経った、1946年12月です。これが1949年7月まで続いて、結果的に、先ほど申し上げたAさんのように、長い人で終戦後4年間もロシア人と生活したのです。

あの故郷はもうない、破綻してしまった。破綻した故郷観をどうやって修復するのか、これは高齢の樺太引揚者にとっては、急を要する課題であるわけです。これまで挙げた例からも察しがつくように、故郷の修復にはいくつかの方向性が観察できます。まず、故郷が商品化されているということと言わなくてははいけません。私が参加したこのツアーも、一種のパック・ツアーで、便利な旅行商品であるわけですね。そうでなければ、不在の故郷を探訪するという、矛盾の前に多くの人はただ立ちつくすだけです。どうすればいいか分からない。この商品を消費しながら、制度的な聖地としての故郷、恵須取の場合はその中核を為すのが鎮魂碑ですが、それに向かって巡礼の旅を行い、長い間心につかえていたものを解きほぐし、一区切りつけて、帰還する。そういう方向性があります。しかしそれだけでは済まされない、言ってみれば実存的な問題が付きまといます。この方向性というのは、Aさんのご母堂の招魂と慰霊の例が

そうでした。あるいは、我にもなく塔路小唄を歌ってしまう、そういったこともその表れかもしれません。

生活世界の断片を縫い合わせる

もう1つBさんの話を紹介します。Bさんは、81歳の男性で、子どもの頃は祖父母と一緒に住んでいて、お祖父さんは炭鉱の共同浴場の管理人でした。Bさんは遥々塔路までやってきたのはいいのですが、幼少時のことを思い出そうとしてもほとんど手がかりがない。せいぜい道路くらいしか、回想のよすがになるものがない。しかし、ふと、コンクリート製の煙突の残骸を発見した時、Bさんは、自分がその昔住んでいた家の間取りや、寸法までが分かったというんですね。これだけは自分のものだったと思った。

そうすると、「故郷」の修復は結局のところ、人それぞれの故郷の再発見ということになるかもしれませんが、大きな器に喩えることができる、そういう意味で、定式化された故郷—それに収まりきらない、あれこれの、それ自体はちっぽけな、しかし、確かに生きていたんだと言える、私の生活世界の断片、これが聖なるものとしてパッチワークのように縫い合わされていくといえます。これは単純な話に聞こえるかもしれませんが、軽視できないことなんです。というのも、このツアーの参加者たちは、その喉元まで出かかっている、ロシア人への恨みつらみ、これをぐっと堪えて、あるいは逃避行、抑留生活、引揚げの悲惨さ、辛さを語ることに終始する、そういうことじゃなくて、何か心底誇るべきものを彼の地に探索しようと努めているからなんです。修復、復元となると、過去を指向するものなんですけども、個人の心の底に大切に秘匿される「故郷」だけかという、そればかりではなく、もう一度、ある意味で共同性に関われていくというケースもあります。これこそが、今後の希望であるように思われるんですけども、そういった例として、Cさんの例を出しますね。

Cさんは71歳の男性で、サハリンに工事用の機械や機材を輸出する商売をしています。恵須取までの道中は、先ほど申し上げましたように、未舗装の穴ぼこだらけの道路が続くんですが、あちこちで道路工事をしている。その現場でCさんは、自分が売った機械が現に使われているのを目撃します。まるで行方不明だった我が子を偶然探し当てたようなCさんの喜びようでした。商売というのは結局のところ、売った買ったの世界かもしれませんが。確かに儲けになる限り、誰が生産しようと誰が仲介しようと、誰が消費しようと構わない。そうかもしれませんが、モノ・カネの流れの中で当事者の顔が浮かび上がる、そういうこともあるわけですね。この樺太山中の工事現場で、過去の故郷と自分のつながりを探し求めてきたCさん、そのCさんはそれだけではなくて、現在生きられている故郷と自分のつながりを発見したわけです。

故郷を未来に向けて開く

もう1つ、Dさんの話をします。Dさんは84歳の男性で、子どもの頃、一家は恵須取で農業を営んでいました。Dさんの畑は、恵須取川に架かる橋の袂にありました。その橋が運良く元の場所に架かっていた。そのため、住居の所在が分かりました。周りは牧草地になっていて、Dさん曰く、手入れされていることに安堵した。父母や、一兄が切り開いた土地は、今やロシア人が受け継いでいる。牧草が豊かに実っていて、かつての苦労が無にならず、継承されていることに、Dさんは喜びを隠しませんでした。もちろんこれは、幸運で稀有な例です。けども、島、あるいは土地をめぐる国家間の争奪戦、それを超越したところで、あるいはそれに付随するある種の怨念を払い除けたところで、未来に目を向けている点、これは特筆すべきだと思います。

最後に、樺太で感じる日本語の魅力をお話して締めくくります。樺太に残留した、朝鮮半島からみの家族が、お母さんが日本人、お父さんが朝鮮人、そういった家庭が多かったんですが、樺太

に残留した家族の一人である E さん、この人と塔路で会って話をした折のことです。洗濯物が「ばふらめく」そういった風の強い日のことでした。「ばふらめく」って分かりますか？ はためくということなんですね。北海道でもそう言います、あるいはそう言いました。仕事は何かと聞いたら、E さんは「してから、昼は店でバンペイしてる」と言います。「してから」は「そういうわけだから」ですね。「店番をする」というのは分かりますが、「バンペイしてる」って久しぶりに聞いて、ああ日本語は今もこの地で生き延びているというふうに思いました。

樺太の旅における故郷探訪は、まずはみんなのもの、公共的で公式的な故郷の像をいったんなぞるわけです。いったん受容しながら、そこから一步踏み出して、旅行者それぞれが親密な像を作っていく、そういう傾向があります。そういう個人の思いに収束するだけではなく、あるいは過去に遡るだけではなくて、今ここで、再び人と人のつながりを発見し、それを喜ぶ。それを喜んでもう一度、共同的なもの公共的なものについて位置づけていく、そのような傾向を見落としては、あるいは見逃してはいけません。私は、西山先生の課題3つに、1つひとつ区分けして答えるわけにはいきませんでした。これから在職期間2年あまりで、自分には観光創造学に貢献できることがあるとは思いませんけども、この種のツアーに創造性の芽が何かあるとしたら、将来的に期待できることがあるとすれば、このように親密圏から再び公共圏へ、恨みがましさを乗り越えてつないでいく、そこに新たに期待できることがあるのではないかと考えています。独りよがりかもしれませんが、ご批判を頂戴したいと思います。ありがとうございました。

【コメント・質疑応答】

コメンテーター1：小林（天）

大変興味深いお話をありがとうございました。

私は以前に小笠原の仕事をしていたことがあります。今回は、樺太という北の事例ですが、南の事例としての小笠原と対比しながら伺っていて、非常に面白かったです。

まず1つ反論がございます。半分冗談で申し上げていますが、唱歌「故郷」と似たようなトーンで「朧月夜」という歌がありますね。作詞家は同じですが、彼は長野県人、信州人です。唱歌「故郷」を事例にした、イメージとしての『故郷』の固定と普及というお話でしたが、「故郷」は長野県人のDNAに訴え掛ける場所があって、さらに「朧月夜」を聴くと、時と場合によっては涙腺を刺激されることもあります。長野県人だけでなく、山間地の田舎、つまり菜の花が咲き乱れ猿が出るような所、こうした所に住む者には極めてリアルに感じられるのです。

宮下

先生が仰っているのは、唱歌「故郷」や「朧月夜」がリアルだということですか？

小林（天）

決してそうではありません。歌全体のもたらすイメージ、雰囲気が我々南信州出身の人間の心をくすぐるところがあるということです。そして、立身出世という分析がありましたが、まさにその通りです。唱歌「蛍の光」には「身を立て、名を上げ」というフレーズがあります。文部省唱歌が意図したものは、宮下先生がおっしゃった効果をまさにあまねく引き起こしたと感じました。部分的な反論で申し訳ありませんが、私にとっては極めて具体的で強烈なイメージがあるということを前段で申し上げてから本題に入ります。

先ほど申し上げた、北の事例と南の小笠原の事例を対比についてです。小笠原は1830年に25人のハワイからやって来た人たちが住み始め、1872年から日本の領土になります。その時の人口は50人くらい。それが、1940年には7,700人にまで増えています。とても豊かな南洋性の農産物をベ-

スに、あるいはウミガメやサングなど海の産品も交え、日本の平均所得の10倍くらいの収入があったといわれます。それが、1944年に、米軍の進攻に備え、陸軍の方針のもとで硫黄島も含めて7,700名の住民が強制疎開させられました。朝に通知して、午後一人2つの荷物だけ持って港に集まるというあっという間の出来事でした。ですからほとんどの住民は、庭に大事な物を埋めることしかできませんでした。その後の23年間は、ほぼ米軍関係者しか住まないような状態で、歴史の空白が生じます。

明治以降の帝国の拡大の中で何が起きて、その後はどのような状況なのか。北の方は、墓参団、忠魂碑というものがありますが、これは望めば自由に行けるのですか？

宮下

いや、なかなか。ペレストロイカ以降ですね、だいぶ楽になりました。21世紀になってから、民間人の渡航は増えてきました。それまではなかなか大変で、軍事基地でしたから、鉄のカーテンの向こうは見えないと。墓参は、1972年から北海道庁が要請して行くというかたちが34回くらい続いて、それ以後、旅行会社が手配して、というかたちが生まれました。ロシアの場合、招待というのがベースになるんですね。だから個人ではなかなか行けません。

小林（天）

なるほど。小笠原の場合、父島、母島、硫黄島という3つの地域がありますが、父島と母島には2,500人ほどが住んでいます。7,000人を超える人びとが強制疎開させられ、アメリカから日本に返還されたのは1968年。その時に小笠原に戻ったのは、わずか1割の600人から700人ほどでした。ほとんどは本州で生活基盤ができてしまっていた。農地も、現在は戦前の5%くらいしか活用されず、他はジャングルに戻ってしまっています。

現在は、父島と母島の間は自由な行き来が可能

です。しかし、硫黄島には戦後まもなく米軍基地ができて、日本に返還された後も自衛隊の基地に移行しました。硫黄島では22,000人が亡くなっています。民間人については、小笠原には健康な男子だけ800人が軍の補助要員として残されましたが、1%しか生き残らなかった。8人しか生き残らなかったんです。合わせて2万数千人が亡くなったのに、遺骨処理がほとんど為されていません。

宮下

樺太も同じ状況です。

小林（天）

日本の政府は何をしているのかというと、政治家が忠魂碑だけを建てる。忠魂碑を建てる予算と時間があれば遺骨を収集すべきだと、私は腹が立ちます。そうした、帝国の拡大と消失に伴う後処理は、結局は民間の誰かが細々とやるしかないなというところに放置されています。

こうした現実をどう考えればよいのでしょうか。つまり、国家、軍隊、兵士、そして後始末、これらは将来につながってくるポイントです。しかし、そのまま戦後70年もの間、ほとんどの人が忘れているというか、なかったことにしようとしている。まさに記憶と喪失の問題で、どんどん記憶が薄れていくのを放っておくわけにはいかないだろうと思います。骨を拾わないという行為の問題ではなく、考え方として、そうした国のあり方はどうなのだろうと。もう一度この点をしっかり考えないと、どんどん情けないかたちで、悲劇が喜劇として演じられるのではないかという懸念を感じています。

話が違う方に向いていると思われるかもしれませんが。しかし、ツーリズムを我々が考えていく際に、皆さんが異口同音におっしゃっているように、平和というキーワードがあります。私は亜細亜大学のホスピタリティマネジメント学科を、総合観光学部というものに格上げしたいと考えております。そのためのスローガンは tourism for peace で

す。そこからバックキャストして、今のお話にはとてもインスパイアされるところが多かったです。ありがとうございました。

コメンテーター2：鎗水

私はどのようにお話を聞いていたかという、自分の故郷と自分の関係はどうなんだろうかと考えておりました。私はまだ26歳ではありますが、もう実家を離れて10年くらいになり、その間も5、6回くらいしか帰っていないという状況でして。自分と故郷との関係というか、皆さまにもそれぞれ故郷があるとは思いますが、その故郷に「帰る」ということも1つの旅なんだろうと思います。ちょうどその帰省の旅とはどういうものなのかとちょうど修士1年の頃に先生の講義のレポートで書いた覚えがあります。その旅はいったい何なんだろうと、まだ考えがまとまらないんですが、帰省というものはなんだろうか、1つの旅の形として考えているところです。それとまた話は変わって、自分が帰ったときに、だいぶ街なみが変わり寂れてきたなと感じると、その時には自分がもっている昔のイメージでアニメを作りたいなどと、自分の研究もあるでしょうが、自分の中で美しかった街をそういう形で残してみたいと思ったりもするんですが、そういうアニメと「故郷」ということだと、これはいつも山村先生とも話していることなんですが、日本のアニメの中での田舎のイメージは、やはり信州だねと。信州は実際に舞台として使われることも多く、この2年ほど2人で2、3度長野へ行って、やっぱりアニメの中で表象される「田舎」は信州だよねという話をしていたら、天心先生から信州というお話が出てきて、こんなところできれいに繋がったなという感じで驚きながら天心先生のお話を聞いていました。

コメント：白井

ずっと話を聞いている中で、今の鎗水さんの話も含めて、故郷の中で、自分たちがどうしてもできない、外的な要因で故郷を出なければいけない

人たちの故郷の思いと、ある程度の選択肢があった上で、たとえば家族で引っ越すなどで故郷を出た人たちの故郷の見方、まったく自分の事情で故郷を出た人の故郷の見方、というような分類をすると、今日の話は一番過酷なケースなのですが、このあたりの違いをどう考えたらいいのか、ということ聞きながらずっと考えていました。あとは言葉尻のようなところもありますが、怨念の超克という言葉があり、唱歌と啄木の話が出ました。その流れで言うと、室生犀星の「ふるさととは遠きにありて思ふもの、そして悲しく歌うもの」は、超克の方向かなと。こう思いながら聞いていました。

回答：宮下

天心先生、鎗水さん、白井先生、ありがとうございました。peaceということ、最後に怨念を超えてということは、ある意味、和解ということですね。悪態をついて溜飲を下げたいのは山々かもしれないが、それを超えるためには何か、自分が納得するものを見つけなければならないわけですね。しかも足元に。鎮魂碑に寄り添うのではなく、自分の足元にそれを見つけなければならないのは、それは大変なことだと思うし、1つひとつ評価して、旅とはこういうものをもたらしのだと、報告していく必要があるのだなと思いました。どうもありがとうございました。